



森 宗吉



森氏の功績を称える石碑  
(三角公園内)

### 孟宗竹製の水道管

高隈村では、1900（明治33）年に、今本甚吉が孟宗竹による導水を行っています。

そして、小野勇市も、1901（明治34）年頃、集落に、高隈山中から8kmに及ぶ孟宗竹の導水管で引水しました。竹のにおいや、破損の続出など難点はありました。1927（昭和2）年に笠野原上水道組合による給水が始まるまでこの竹管は使われたそうです。

小野は笠野原台地の土地基盤整備の大志を胸に高隈川から笠野原台地にかけて調査を行い、大地の北端の三角あたりに導水可能であると確信したことから近隣への呼びかけに尽力しました。

## 092

## 人物 1

鹿屋市の笠野原台地での生活に欠かせない水の確保に貢献した人物を3方掲載します。

### ○<sup>もり</sup>森 <sup>むねよし</sup>宗吉

1864（元治元）年笠野原に生まれ、鹿屋村の助役、村長、鹿屋郵便局長などを歴任しました。

笠野原開発問題が明らかになると、その事業計画推進に情熱を注ぎました。当初鹿屋町は、この問題にあまり積極的ではありませんでしたが、町役場や地主の協力を得るために、寝食を忘れて説得を続けてやっと賛同を得るに至ったといえます。

そして、水道工事が始まるとその援護に労をおしませんでした。

しかし、森は耕地整理事業の完成を見ずに1932（昭和7）年に亡くなりました。

### ○<sup>なかはら</sup>中原 <sup>きくじろう</sup>菊次郎

1880（明治13）年西串良に生まれ、戦後、在郷軍人会長として戦後処理を行う一方、農業振興の為に尽力し、串良村農会長等の数々の要職を歴任し、西串良村長を経て県会議員となりました。

そのころ、後述の小野勇市らの動きに呼応し1926（大正15）年に笠野原耕地整理組合を創設して組合長



中原 菊次郎



小野 勇市

となり、一部の反対者の迫害や財政の苦しみを耐え忍んで処理し、前述の偉業を成し遂げました。1949（昭和24）年に亡くなりました。

○小野 勇市

1883（明治16）年高隈村に生まれ、30歳で村会議員となりました。彼は、常日頃、笠野原台地での生活には水が最重要と考えていましたが、高隈村だけではどうすることもできず、隣接する町や村に協力を呼びかけ、出会ったのが、前述の中原菊次郎でした。

二人は同じ理想を掲げ、互いに認め、強い志のもとに3町村（鹿屋町、高隈村、串良村）を突き動かし、笠野原耕地整理組合及び笠野原上水道組合を組織し、中原菊次郎は組合長、小野勇市は副組合長となりました。まずは、水道事業に着手し、並々ならぬ苦勞の末、3年の時を経て、1927（昭和2）年に笠野原台地の飲料水問題を過去のものとししました。

次に、以前から確信していた高隈川からの導水に向けて動き出したものの、その完成は、他の頁に記載されている通り平坦なものではありませんでした。それでも、1927（昭和2）年から1934（昭和9）年の7年2カ月で完成することができました。その後1939（昭和14）年に57歳で亡くなりました。

### 台地に「水」を夢見た男

中原菊次郎さんの娘であるタキさんの話です。

生前、まだ耕地整理が終わって間もないころ、二人で、串良から鹿屋へバスで向かっている時に車窓から見える十三塚辺りの畑の説明をしていた中原氏は、「やがては、ここを水田にするのだよ」と言われたそうです。それを聞いた、娘さんはびっくりして、「そんなことが出来るのですか」と、すると氏は、「うん、出来るんだ、川の水を引き上げて、畑に流すのだよ」と説明されたそうです。当時は、川は、遙か彼方の谷底にしかないのにどうやって、と驚くばかりだったそうですが、その話を聞いて50年余り、現在の台地の様子を見ると、畑地灌漑用水を使って、さまざまな野菜や花・お茶等が栽培され、まさにお父様の夢見た世界が広がっています。台地の様子を見るたびに、そのことを思い出し、感動されるそうです。



永田 良吉



科学航空大博覧会  
水族館や物産館、売店なども  
設けられていました。

### 星塚敬愛園の誘致

[項目004参照]

#### 飛行機代議士

永田良吉は早くから飛行機の重要性を認識しており、まずは1922（大正11）年県会議員時代に笠野原に民間飛行場を造成し、衆議院議員となった後も航空機の誘致運動を継続し、1936（昭和11）年に鹿屋海軍航空隊の開隊にいたっています。

これは、彼の度重なる国への請願や協議によるもので、後に「飛行機代議士」や「請願代議士」と呼ばれるようになった<sup>ゆえん</sup>所以です。

#### 永田良吉に関する書籍

鹿屋市立図書館には永田良吉に関する書籍「永田良吉伝」永田良吉伝刊行同志会編集部編が蔵書されています。貸出はしていませんが館内での閲覧は可能となっていますので、興味のある方は、是非、手に取ってみてください。

093

## 人物 2

ながた りょうきち  
○永田 良吉

大始良村会議員、大始良村長、鹿児島県議会議員、衆議院議員、鹿屋市長など、これらは永田良吉が歴任した役職の一部となります。

海上自衛隊鹿屋航空基地、星塚敬愛園の鹿屋市への誘致や高隈ダムの建設推進を行い、旧制中学校設置に尽力するなど、これらも彼が行った実績の一部です。まさに、今の鹿屋市に続く政治・経済・教育等の基盤を作り上げた人物と言えます。これから、その活躍の一部を紹介していきます。

#### ○大始良村長時代

彼は1913（大正2）年に若干27歳で大始良村会議員に当選し、1917（大正6）年には31歳で大始良村長になりました。当時大始良村の財政は会社でいうと倒産寸前の状態でしたが、彼は村の財政の為に養蚕業を奨励します。その後、大始良には養蚕試験場が建設されます。（養蚕業は、その後の化学繊維の台頭により衰退していきました。）



市役所前にある胸像に埋めこんであるプレート

明治十九年 永野田に生る 性一徹  
清貧に甘んじ 郷土を愛す 政治を  
志し五十有余年 大隅の開発に精魂  
を傾く 昭和三十九年勲二等旭日重  
光章を受け同年名誉市民となる 世  
人挙げて大隅の父と崇む  
昭和四十二年十一月三日  
永田良吉先生顕彰会

左記プレートの記載内容

### ○鹿児島県議会議員時代

1919（大正8）年に鹿児島県議会議員に当選し、鹿屋への旧制中学校設置運動を展開し、1923（大正12）年に県立鹿屋中学校が開校されます。これが現在の県立鹿屋高等学校になります。また、大隅半島への国有鉄道敷設も推進しました。[項目022参照]

### ○鹿屋市長時代

1943（昭和18）年に鹿屋市長に就任し、終戦後、アメリカ軍進駐地の交渉を、彼の機転により優位に進めました。その後、公職追放により1946（昭和21）年に一旦市長を辞職しています。

1956（昭和31）年に再び市長となり、1958（昭和33）年に科学航空博覧会を鹿屋航空基地内で開催、1959（昭和34）年には長年携わった高隈ダムが着工され1967（昭和42）年に通水しています。

永田良吉は1964（昭和39）年に鹿屋市長を引退し、同年鹿屋市初の名誉市民となりました。また、後年、藍綬褒章や勲二等旭日重光章を国から与えられています。1971（昭和46）年84歳で亡くなりました。

### 私財を顧みなかった

これだけ、情熱的に鹿屋・大隅の発展に尽力した永田良吉は、西郷隆盛の「金も要らぬ、名も要らぬ清廉潔白、誠実一路」を地で行くような方で、自身の財については全く執着がなかったようです。

例えば、1924（大正13）年の衆議院総選挙に落選戦後は、母親がその借金苦でかなりの苦勞をしています。

また、お孫さんの話によると、お孫さんが結婚後（昭和45年頃）嫁をつれて帰省した時、家のあまりのみすぼらしさに嫁が驚いたという話が残っています。

永田良吉の活躍をみれば、悠々自適の余生を送っているはずなのに、何もかも人に惜しげもなく分け与える性分のために、自分の手元に最低限のものしか残していなかったのでしょうか。



上別府 市郎



肝属中央家畜市場に設置されている  
上別府市郎と第20平茂号の銅像

### 黒毛和種の「血統」とは

黒毛和種は、その牛の祖先をたどることで、どのような特徴を持った遺伝子を受け継ぎ、どのような能力を持っていることが期待できるか見ることが出来ます。

このような黒毛和種の血統には、その祖先に応じていくつかの「系統」に分けることができます。

本文中の「第20平茂号」と「第20気高号」は「気高系」と呼ばれる系統に分類されます。

気高系の牛は鳥取県で1959（昭和34）年に生まれた「気高号」を祖先とし、特徴としては、発育が良く、体が大きくて全体的なバランスが良いこととされています。

肝属地域には、この気高系の血統を持った牛が多く、地域の肉用牛改良の特色となっています。

この他主な系統として5つの系統が全国各地に存在し、その特徴に応じた地域特有の改良が進められています。

094

## 人物3

鹿屋市の基幹産業として発展している畜産業の振興に貢献した人物を2名紹介します。

かみべつぷ いちろう  
○上別府 市郎

上別府市郎は、1926（大正15）年に鹿屋市で生まれ、25歳にして種雄牛を導入し、1961（昭和36）年に和牛家畜人工受精所を開設、2002（平成14）年1月に亡くなるまで、60頭以上の種雄牛を育成しました。

その中でも、1976（昭和51）年にその能力を見出して導入した「第20平茂号」は、肉用牛改良に多大な影響を与えた名種雄牛です。第20平茂号は、体の発育・バランスが非常に優れていました。この牛の産子たちはこのような優れた点を受け継ぐこととなり、肉牛として重要な産肉能力と親牛として重要な哺育能力に優れた牛たちが数多く誕生することとなりました。

第20平茂号の能力を受け継いだ産子たちは全国に多数生まれ、その中から各地域の肉用牛業界を担う後継牛も多く誕生することとなり、第20平茂号の持つ能力が全国の肉用牛改良に大きく貢献しました。

第20平茂号を名種雄牛に育て上げた上別府市郎のおかげにより、この鹿屋市及び肝属地域が、畜産の一大産地として全国に名を挙げることができるようになりました。



坂元 親夫



ダイエーセントラル牧場関係者との写真  
(前列の左から2番目が坂元親夫)

さかもと ちかお  
○坂元 親夫

坂元親夫は1944（昭和19）年に鹿屋市で生まれ、種馬・種雄牛の管理の傍ら、家畜人工受精師や家畜商も行っており、肝属地域の肉用牛改良に貢献することとなる「第20気高号」の育成を行いました。

坂元親夫が様々な事業を展開する中で、本市の畜産業に大きく影響を与えることとなったのが、当時まだ主流ではなかった大規模肥育預託を行う企業を本市へ誘致したことです。

肥育預託とは、企業が導入した子牛を農家へ預け、肥育を行う方法で、預かった農家は企業から預託料を受け取ることにより、成績に左右されにくい安定した経営を行うことができます。坂元親夫は地域の畜産農家の経営安定を願い、預託を行う企業である「ダイエーセントラル牧場（現鹿児島サンライズファーム）」と連携し、本市に定着させました。

このような生産方式を、現在は様々な企業が行っており、本市の安定的な肉用牛産業の運用の一翼を担っています。その仕組みの礎を坂元が築いたといえるでしょう。

その後も2014（平成26）年6月に亡くなるまで、地域畜産業の発展に尽力しました。

「和牛」と「国産牛」の違い

スーパー等のお肉コーナーで牛肉を見てみると「和牛」と「国産牛」の2種類の表記がされています。

同じ日本で生産された牛肉なのに、なぜ表記が違うのでしょうか。

実は、「和牛」と表記されている牛肉は「黒毛和種」「褐毛和種」「無角和種」「日本短角種」の4種類みの牛肉です。

黒毛和種は全国的に広く飼育されていますが、褐毛和種は主に高知県と熊本県、無角和種は主に山口県、日本短角種は主に岩手県や北海道で飼育されています。

「国産牛」と表記されている牛肉は、この4種類以外の牛で、国内で生産されたものとなります。

買い物するときには、パッケージの内容を見ながらお買い物してみてもいいでしょうか。



輝北歴史民俗資料館に展示されている「らしく」の書

095

人物4

ここでは、明治初頭に行政官にして歌人であり鹿児島県の歴史にも功績を残した方を紹介します。

たかさき まさかせ  
○高崎 正風

1869（明治2）年から1871（明治4）年まで、現垂水市・鹿屋市花岡・高隈・輝北地域の行政官（地頭）として赴任し、特に輝北地域の百引村の麓再編など、地域の声に耳を傾け治政を行い、教育にも力を入れました。また、高隈や輝北地域の「へし児」（妊娠中絶）対策を行いました。その後、輝北地域へ「らしく」の書を送るなど、地域の明主として現在も輝北地域の人々に慕われています。

この高橋正風は、現在の鹿児島市川上町の出身で、薩摩藩士高崎五郎右衛門温恭の長男。1849（嘉永2）年、お由羅騒動によって父五郎右衛門が切腹し、翌年に正風も連座して奄美大島

に流されますが、1852（嘉永5）年に赦され鹿児島に戻ります。しかし、士分に復籍することは許されておらず、苗字を名乗ることはできませんでした。

それから、10年後の1862（文久2）年に、藩より家督相続・士分復籍を許され、晴れて高崎姓を名乗り、五番組小与八番に組み入れられます。そして、薩摩藩主の父である島津久光が公武合体を実現すべく江戸へ上京していた時、京都では有馬新七ら尊王攘夷派が暴挙に出ようとしていました。久光はこれを知り、正風と藤井良節を京都に向かわせ対処させました。向かった正風等は、橋口壮介・柴山竜五郎らを見つけ、久光にこれを報告し、寺田屋騒動の立役者となり、これにより久光の信頼を得て、土佐の小南五郎右衛門や武市瑞山、長州の宍戸九郎兵衛や久坂玄瑞らと会うなど、諸藩との交渉役・偵察役として活躍します。また青蓮院宮（中川宮）とも会い、「九重の雲井の菊



高崎 正風

ゆらそどう  
お由羅騒動とは、

江戸時代末期（幕末）に薩摩藩で起こったお家騒動。別名は高崎崩れ、嘉永朋党事件。藩主・島津斉興しまづなりの後継者として側室の子・島津久光を藩主にしようとする一派と嫡子・島津斉彬しまづなりの藩主襲封しゅうほうを願う家臣の対立によって起こされました。

を 折りかざす今日そわが世のさかり  
なるらん」という歌を送っています。  
この歌は青蓮院宮を通じて時の孝明天皇こうめいてんの目に入り、天皇からお褒めの言葉を受けたそうです。

また、公武合体派である、久光の意を受けて会津藩公用方あきづきていじろう秋月悌次郎・広沢富次郎・大野英馬・柴秀治らに密かに接触します。そして1863（文久3）年、中川宮と秋月ら会津藩と協力して、京都から長州藩を追い落とすのに成功し（八月十八日の政変）、薩会同盟さつあいの立役者ともなります。その功績により京都留守居役に任命されますが、藩内で討幕を望む声が大きくなり、薩長同盟さつちやうが結ばれるなどして薩会同盟が消滅していくと、公武合体派は退潮を余儀なくされ、正風も一時帰国（鹿児島へ帰ること）することとなります。その後再び京都に上り、王政復古後の1868（慶応4）年に征討軍参謀に任ぜられますが、大坂城の落城を理由に征討軍

参謀を辞退し再び鹿児島へ帰ります。

武力討幕に反対して西郷隆盛らと対立したため、維新後は鹿児島に帰り、花岡や高隈・輝北地域の行政官になります。

その後は、1871（明治4）年に新政府に出仕。翌年に左院視察団の一員に任命されて、2年近く欧米諸国を視察し、1875（明治8）年に宮中の侍従番長、翌年から侍補じほになります。

1886（明治19）年に二条派家元三條西季知さんじょうにしずえともが死去した後を受け御歌係長に任命され、1888（明治21）年には御歌所初代所長に任命されました。

1890（明治23）年には、初代國學院院長に就任し、1895（明治28）年に枢密顧問官すうみつ等も務めました。

1912（明治45）年75歳で亡くなりました。





和田 貞則



商工会議所会館

096

## 人物 5

ここでは、市の商工業界に大きな業績を残した方を紹介します。

○和田 貞則

和田貞則は、1923（大正12）年生まれで、第8代の鹿屋商工会議所会頭として、5期15年務め、その間、鹿屋・大隅地域の経済的浮揚の為、商工会議所議員定数の拡充や常設委員会構成の改編、また常設委員会委員長に若手経営者を起用するなどし、権限を大幅に委譲して商工会議所運営の強化を図ると共に諸制度の改革、充実に取り組みました。

具体的には、商工会議所活動の原点でもある会員拡大の必要性を強く訴え、会員増強委員会を設置し役職員一丸となった運動を展開し、鹿屋市内の商工業者の60%を越す組織率を達成しています。

また、日本の経済3団体の一つである日本商工会議所の議員に鹿屋商工会議所として当選し、組織の安定、財政基盤の強化を図り、行政はもとより各

業界からの信頼向上にも貢献しています（2023（令和5）年1月1日時点も議員継続中）。現在の商工会議所会館の建設の際は、事業費の捻出のために議員積立金制度の設置、国・県・市の補助金の獲得への尽力のみならず、一般募金の確保に当たっては自ら1億円を拠出、東奔西走して目標の達成に努めています。（1992（平成4）年11月に着工、1994（平成6）年2月竣工）さらに、鹿屋・大隅地域の振興のために、1995（平成7）年3月、大隅地域の2市17町（当時）の商工会議所・商工会を網羅した「大隅経済地域開発推進協議会」を自らが発起人となり結成し、会長として東九州自動車道の早期完成はもとより大隅縦貫道の建設、各種港湾・道路の整備等についても取り組んでいます。

また、今では鹿屋の3大祭りの一つとして定着している、「エアームリアルinかのや」を、自ら実行委員会会長となり海上自衛隊鹿屋航空基地の開隊40周年記念事業として、1994（平成6）年にスタートさせています。

和田は2021（令和3）年に98歳で亡くなりました。



現在鹿屋市で運用されている水力発電所の九州電力谷田発電所(下高隈町)

現代では電機は欠かせないインフラです。ここでは、鹿屋で初めて発電事業を行った方を紹介します。

#### ○平田 禎

平田禎は、1870（明治3）年に鹿屋村古前城に生まれました。

鹿屋に初めて電灯が灯ったのは、1913（大正2）年6月8日です。鹿屋市の有志の間で、文明の利器である電灯にあやかりたいという願いから、平田などの発起人が街の旭通りに木炭による火力発電所（鹿屋電灯株式会社）を設けました。こうして鹿屋の街にも電気が灯るようになりました。この頃の逸話で、試運転のときには肝属川に放電したところ、付近の魚が大量に浮かび上がるということがあったそうです。

その後、1920（大正9）年頃には、高須でも高須川の地形を生かして岩之上発電所が設けられ、海岸の骨粉製造所や製材所へ送電し、余った電力は家庭用として提供しています。こうして鹿屋の地にも少しずつ電気が広まって

いったようです。

この他にも、平田の活躍は多岐に渡っており、当時、鹿屋地区の農家にとっての重要な用水路であった和田井堰はもともと柴井堰（柴で造られている）で、1879（明治12）年から1880（明治13）年にかけて禎の父である五郎左衛門が発起人となり、禎、そして禎の息子である太郎の三代にわたる大工事を行い石製の井堰に改築しました。

また、馬の改良研究や祓川・中名の耕地整理、田崎の耕地整理などにも尽力、産業面に多くの功績を残しており、晩年は山林の経営に専念し、1945（昭和20）年に亡くなりました。



谷田発電所遠景



立元 明光  
(2011(平成23)年撮影)



1965(昭和40)年代の桜デパート  
(跡地は「まちなかパーク駐車場」)

097

## 人物6

鹿屋市のみならず大隅半島に、40年以上住んでいる方には、とても懐かしく楽しい記憶であろう桜デパートの創業者についてここでは紹介します。

たつもと めいこう  
○立元 明光

戦後から平成にかけて、鹿屋のまちでひとときわ輝きを放っていたのが北田町にあった「桜デパート」です。立元明光はその創業者です。

桜デパートは家族や友人との買い物やレストランでの食事、屋上遊具等を目当てに市内外から多くの人を訪れる、大隅随一の百貨店でした。

1945(昭和20)年の「桜商会」創業に始まり、桜デパートは1953(昭和28)年に県内2番目のデパートとして開店。その後、人気広がるにつれ規模を拡大し、地下1階地上7階建て、延べ床面積約9,200㎡を誇る大型百貨店として市民から親しまれま

した。名物の桜まんじゅうは、多い日で1日平均2千個販売されたといいますが、また、寿や西原などにも店舗進出するなど、最盛期には860人ももの従業員を抱える一大企業に成長しました。その後、桜デパートは市民から惜しまれつつも1994(平成6)年に閉店。しかし、街と市民に夢を与えた鹿屋のシンボルとして、桜デパートは市民の記憶の中に今も刻まれ続けています。

このようにまちに夢を与えた立元は2019(令和元)年に99歳で亡くなりました。



休日は桜デパートだけでなく周辺も買い物客であふれていました。  
1965(昭和40)年



寺崎 健

## ツツガムシに注意しましょう

鹿児島県を含む南九州は、つつが虫病の患者が全国でも多い地域です。令和3年の感染症発生動向調査における発生状況は、鹿児島県では82件（全国544件）となっており、全国で最も多くなっています。

【本県及び全国における年別発生状況】

年	2019	2020	2021
本県	66	92	82
全国	404	538	544

鹿児島県ホームページより転載

つつが虫病というマダニを媒体とし病気を県内で初めて発見し、多くの鹿児島県民の命を救った方をここでは紹介します。

てらさき けん  
○寺崎 健

現在の肝属郡肝付町で生まれ、1955（昭和30）年県立鹿児島医科大学（現鹿児島大学医学部）を卒業し、鹿児島大学医学部皮膚・泌尿器科助手を経て、1962（昭和37）年鹿屋市西大手町に開業し、皮膚科医として地域医療に携わりました。

大隅地域で昔から秋になると発生した熱病は、「大隅熱」あるいは「秋やみ」と呼称されていた原因不明の熱性発疹症で、死亡することもあり恐れられていました。

1979（昭和54）年に寺崎医師は、この病気の正体が、つつが虫病ではないかと考えました。しかし当時は、鹿児島県では1948（昭和23）年つつが虫病発症の届出制度開始以来1人も届け出がなく、つつが虫病は県にはない

はずだとされていたため、慎重に調査研究を続け、1980（昭和55）年12月に、5人の患者さんの血液を東京大学医科学研究所に持ち込み血清検査でつつが虫病と確認され、厚生省（現厚生労働省）に届けました。これが、鹿児島県での初めてつつが虫病の発見となり、県内のつつが虫病治療の第一人者となり活躍しました。

県からこれまでのつつが虫病研究の実績を買われ、寺崎医師はつつが虫病の対処法テキスト作成を依頼されています。このテキストにより多くの県民の命が救われました。

このような功績から、鹿児島県医師会より特別医学功労賞を贈られています。

その後も、2017（平成29）年86歳で亡くなるまで、地域医療に尽力しました。



米重選手と地元諏訪自治会との交流会



南日本クロスカントリー大会inきほく  
コース確認時の一幕（左：米重選手）

## 098

## 人物 7

項目080では、体育大学出身のオリンピック人について紹介していますが、ここからは、鹿屋市出身のオリンピック人について紹介していきます。

よねしげ しゅういち  
○米重 修一

輝北町出身の1961（昭和36）年生まれです。1988（昭和63）年ソウルオリンピック陸上に出場しました。

百引中学校陸上部時代に岐阜県の中京商業高校にスカウトされ、高校3年生時には高校駅伝日本一のメンバーになりました。1980（昭和55）年大東文化大学に進学し、1年生のときから箱根駅伝のメンバーに選出され、計3回出場しています。箱根駅伝では、2年生の時は心疾患を患い出場できませんでしたが、闘病後の4年時には区間賞をとりました。また、その年は全日本大学駅伝日本一に輝いています。

さらに、カナダで行われたユニバーシアード10,000mで優勝、ロサンゼルスプレ五輪の10,000mと5,000m

とともに優勝を果たしました。1984（昭和59）年3月の大学卒業と同時に同大学のコーチに就任しましたが、五輪出場の夢を果たしたいと1985（昭和60）年に実業団陸上の名門旭化成に入社しました。

1988（昭和63）年に開催された東京国際陸上において10,000mで自己ベストの27分43秒04（当時日本歴代3位）を記録し、続く7月のフィンランドやロンドンで行われた大会においても日本記録を樹立するなど、オリンピック標準記録も数回突破し、日本陸連の五輪選手に決定、ソウルへの切符を手に入れました。

ソウルオリンピックでは、10,000mと5,000mの2種目に日本代表として出場しています。

また、クロスカントリーにも積極的に取り組み、学生時代から国内の第一人者となり、日本が世界選手権に送り込んだ最初の選手でもあります。「南日本クロスカントリー大会inきほく」[項目079参照]が1988（昭和63）年から始まっていますが、米重がコースの確認などを行っている大会です。



鹿屋での練習風景（福里選手）



ロサンゼルスオリンピック決勝時の写真  
（ゼッケン108番の後ろが福里選手）

ふくさと しゅうせい  
○福里 修誠

鹿屋市寿出身で1955（昭和30）年生まれです。鹿屋中学校から鹿屋商業高等学校（現鹿屋中央高等学校）に進み、カヌーと出会いました。大隅湖や和田井堰で練習を積み、大正大学進学後からオリンピックを目指し、卒業後は戸田競艇組合で働きながらカヌーを続け、1980（昭和55）年モスクワオリンピックの日本代表に選ばれました。

しかし、政治的理由（ソ連のアフガニスタン侵攻に抗議した国々の集団ボイコット）により日本は不参加となり、ヨーロッパ遠征中にボイコットを知った福里は、失意のもと、カヌー選手を一度引退し、母校の大学のカヌーコーチに就任しました。

自らもカヌーを漕ぎながら、指導に当たっていた福里は、オリンピックの代表権を再び獲得し、1984（昭和59）年ロサンゼルスオリンピックで念願のオリンピック出場を果たし、カナディアンペア種目で8位に入賞しました。

これは1964（昭和39）年の東京オリンピックで初めて日本人がカヌー競技に出場して以来、初の入賞となりました。

後に福里は「オリンピックは、開閉会式を含め、会場の雰囲気、観衆の応援、ライバル選手たちの意気込みなど、これまで経験したどの国際大会とも全く異なる大会だった。」と述べています。

翌年、ドイツに1年間カヌーコーチとして派遣され、強化指導法の研修を受けた福里は、帰国後故郷に戻り鹿屋市役所に就職後、鹿児島県のカヌー指導普及に努めながら現役を続け、1990（平成2）年の北京アジア大会では3位という成績を残しています。

福里が鹿屋市で指導を行った中高生や鹿屋体育大学の選手たちは、国体やインターハイ、インカレで活躍し、日本一の選手を数多く輩出しました。

市役所退職後は、再び母校の大学のコーチを引き受け、後進の指導に努めました。指導を受けた選手たちは卒業後、全国各地で選手・指導者として活躍しています。



モントリオールオリンピックでの内山選手

099

## 人物 8

うちやま のぼる  
○内山 昇

鹿屋市旭原町出身で1954（昭和29）年生まれです。

鹿屋中学校から鹿屋工業高校へ進み同校ボクシング部所属選手としてアマチュア・デビュー。1973（昭和48）年4月から中央大学ボクシング部所属、1976（昭和51）年のモントリオールオリンピックでは、ライトフライ級に出場しています。

この時の結果について、内山は後に以下のように語っています。

「相手選手に2回1分42秒RSC（負傷して試合続行不可能と判断した時レフェリーが行う勝敗宣言）負けとなった。終始勝てる相手だと確信していたが、私が右フックを相手の顔面にヒットさせた後、相手が頭を寄せてきて私の右眼上から鮮血がしたたり落ち、医師から続行不能を告げられた。本来なら相手がバッティングによる失格負け

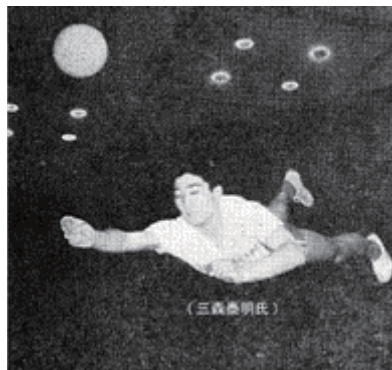
と思ったが、レフェリーは意外にも相手の勝利を告げた。このレフェリーは翌日、審判委員会で処分された。」

内山は、この思いもしない結果に、消えてしまいたい惨めな思いに襲われたそうです。さらに、プロからの声掛けもあった大学最後の試合で目を負傷し引退することになりました。失意の内山は、25歳の時、ある方から「人間万事塞翁が馬」の言葉を教えられ、このオリンピックでの苦い思いをプラスに転じることが出来たそうです。ボクシングを通じた様々な出会いが今の自分を支えているとも語っていました。

アマチュアボクシングの世界での内山の実績は華々しく、全日本アマチュアボクシング選手権大会ではライトフライ級で3連覇（1974・1975・1976年）、1974（昭和49）年には、アジア競技大会銅メダル、1975（昭和50）年にはアジア選手権銀メダルを獲得しています。



現役時代の三森選手



三森選手のフライングレシーブ

100

## 人物9

みつもり やすあき  
○三森 泰明

三森泰明は、鹿屋市東原町出身で1946（昭和21）年生まれです。1968（昭和48）年メキシコオリンピックバレー男子銀メダリストです。

三森氏は、鹿屋中学校で競技をはじめ、中央大学付属高校、中央大学と進み、日本鋼管に所属しました。

中学時代は、県内では三森のスパイクを誰も受けられないほどの選手でした。

メキシコオリンピックで銀メダルを獲得し、続くミュンヘンオリンピックで日本は悲願の金メダルを達成するのですが、彼自身は、ミュンヘンオリンピック出場は叶いませんでしたが、最後までそのメンバーの中で練習を重ねており、日本男子バレーを金メダルへと導いた影の立役者の一人ともいわれています。日本男子バレーの黄金時代を牽引した松平康隆監督の著書やその

他の資料のなかで語られる三森像は、「コートの外では多くを語らず自らをアピールすることもない、しかし、コートの中で力を出すために、勝つために求められることを実現できるよう黙々と練習をする選手」だったそうです。また、ボールに食らいつく執念、バネ、レシーブが三森を表す代名詞とも言われています。

そんな、彼を象徴するエピソードをいくつか紹介します。

多くを語らない三森選手は、チームで食事に出たときの注文は「も」としか言わなかったそうです。「も」は「俺も」の「も」です。因みに海外では「ツー」です。「Me too」の「ツー」です。冗談のようですが、実話だそうです。

身長185cmで中学、高校、大学とエースパイカーとして名声を築いた三森ではありますが、全日本の選手陣に入れば、小柄な選手であり、得意ではなかったサーブレシーブを黙々と練習し磨き上げ全日本に選ばれるようにな





ります。

ミュンヘンオリンピックで、三森はメンバー12人には選ばれませんでした。チームの出発の日に羽田空港への見送りに来ました。その清々しさに松平監督は驚き、そして感謝したそうです。

この清々しく、寡黙ながら果たすべきことを全うする気概などを備えた人柄もまた人気の一因でした。

また、第一線を退いたあとも、その人柄を買われ、インドネシアのバレー監督として赴任しており、東南アジア競技会でインドネシア男子・女子バレーを優勝へ導く偉業も成し遂げています。

バレー界に大きな実績を残した三森は2019（令和元）年に亡くなりました。



掲載は委嘱順です  
令和5.3.31時点

## 「かのやばら大使名簿一覧」

- 哀川 翔 (タレント)
- 榎木 孝明 (タレント・画家)
- 浅井 慎平 (写真家)
- 桂 由美 (ブライダルデザイナー)
- 柴田 亜衣 (アテネ五輪競泳金メダル)
- 国生 さゆり (タレント・歌手)
- 中尾 正一郎 (元県民健康プラザ鹿屋医療センター院長)
- 萩 裕美子 (元鹿屋体育大学教授)
- 大田 瑠璃子 (タレント)
- 田邊 勉 (関東地区吾平会会長)
- 前田 義美 (関東鹿屋会会長)
- 中礼 思無哉 (関西鹿屋会会長)
- 江口 芳人 (関東串良会会長)
- サンダーソン・デービット・パークレイ (ばら園イングリッシュガーデン植栽管理者)
- 桂 竹丸 (落語家)
- C&K CLIEVY (歌手)
- C&K KEEN (歌手)
- 福井 逸人 (元副市長)
- 中小野田 智己 (囲碁棋士)
- 半田 あかり (お笑い芸人)
- サンシャイン池崎 (お笑い芸人)
- 今崎 裕一 (元副市長)
- 田原 博 (関西吾平会会長)
- 下内侍 恵由 (関西串良会会長)
- 奥園 義則 (在鹿串良会会長)
- 藤元 俊明 (関西輝北会会長)
- 宮地 修平 (元副市長)
- 鈴木 健太 (元副市長)